



① 秋の田のかりほの庵の苦をあらみ
わが衣手は露にぬれつつ
夜露のつらい冷たさ
秋の田の(稲刈りの)仮小屋は、草の屋根の編み目が粗いので、袖が夜露に濡れ続けている。・「仮庵」と「刈り穂」の掛詞
後撰・秋
天智天皇

② 春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山
香具山の新緑と白い衣
↓もう春は過ぎ、夏が来たようだ。夏になると白い衣をほすと言う天の香具山に、それが見える。(「万葉集」改作▽P.110)
新古今・夏
持統天皇

○学芸委員会で集まり、練習用の百人一首と競技ルールが配布されました。



百人一首大会 競技ルールについて

【掲示・周知】

群馬県立中央中等教育学校 特別活動部・国語科

- ① 競技の方法
 百枚の札を五十枚ずつ各陣が持ち、相対する源平戦とします。当日欠席があった場合は、審判の先生に申し出て、相手のチームの了承を得て、もとの組み合わせが4対3の4人のチームから1名を欠席のあるチームに当てることができる。もともと4対4の場合は該当しない。
- ② 札の並べ方について
 五十枚の札を三段(自陣の奥から十七枚、十七枚、十六枚、右手前が一枚分空く。)に並べる。札と札の間は、1センチ間隔にする。相手の札との間隔は、3センチ空ける。競技が始まったら、札の位置を変えることはできない。乱れた札は直してもよいが、取りやすいように並べかえてはいけない。
- ③ 札の読み方について
 最初に「から札」を読む。上の句を読み、その後、下の句を二回読む。
- ④ 札の取り方について
 「払い手」はなしとする。押さえ込んで「押さえ手」で取ること。
- ⑤ お手つきについて
 読まれた札のない側にお手つきしてしまった場合は、相手から一枚もらう。読まれた札のある側にお手つきした場合は、もらう必要はない。お手つきの数だけ札の受け渡しが発生する。フライングも同様にお手つき扱いとする(天符戦時は例外。参照。)
- ⑥ 相手の陣地の札を取った場合
 相手に自分の陣地の札を一枚渡す。どの札を渡しても構わない。また、受け取った札もどこに置いても構わない。受け渡しはできるだけすばやく行う。
- ⑦ 札が最後に2枚残った場合
 大将戦を行う。2枚の札を真ん中に並べ、真ん中に座っている人同士で札を取り合う。同時に取った場合は同じ札で再戦を行う。フライングについては間違えた札を取った場合はその時点で相手の勝ちとする。正しい札を取った場合ノーカウントとし取り直しを行う。フライングの減点は1回までとし、その前フライングをした場合は結果にかかわらず相手の勝ちとする。
- ⑧ 得点について
 自分の陣地の札がなくなった方を勝ちとする。勝ち点の合計の最も多いクラスが優勝となる。
- ⑨ その他
 手を床につけて、札を読むのを静かに聞く。すぐに競技に移れない場合には、かならずチームの一人が手を上げること。判断に困るときは、周りの先生方(審判)に手を挙げて相談すること。審判の先生が判断できない場合は、その札をノーカウントとして一度隣に置き、次順の札を取った方がその札もとることとする。勝敗が早く決まってしまった場合は、「記録用紙に、勝ったチームのキャプテンが結果を記録し、それを負けたチームのキャプテンが確認したあとならば、札を取り続けなくても構わない。(くれぐれもすべての札が読み終わるまでは私語等で、他の競技の邪魔はしない。それと思われる札のそばに軽く手を置いてガードしたり、札を取る気のないフレイムはしない(お手つき扱いとなる。))」。

